

# SPECIAL INTERVIEW

地域医療研究所長  
山田隆司先生



## いつまでも“家庭医”であり続けるための 心の糧であった「月刊地域医学」に 20年分の感謝を込めて。

聞き手：日光市民病院 管理者 杉田義博先生  
オーディエンス：地域医療研究所 へき地医療研究センター アドバイザー 中村正和先生  
山口県立総合医療センター へき地医療支援センター長 原田昌範先生  
大分市医師会立アルメイダ病院婦人科 部長 佐藤新平先生

月刊地域医学リニューアルを前に、特別巻頭インタビューとしてこれまで20年余にわたって編集委員長を務めた山田隆司先生を、杉田義博新編集委員長がインタビューした。

オーディエンスとしてZoomで参加した編集委員の中村正和先生、原田昌範先生、佐藤新平先生も途中から話に加わり、熱量のあるディスカッションとなった。

### 2005年月刊地域医学スタート

杉田義博(聞き手) 月刊地域医学は2026年4月号からリニューアルします。今号は現行最後の月刊地域医学ですので、この20年間、編集委員長を務められた山田隆司先生に巻頭インタビューに登場していただきます。山田先生にこれまでを振り返っていただき、またこれからの月刊地域医学に期待することを中心にお話を伺いたいと思います。

山田隆司 杉田先生には次の編集委員長をお引き受けいただくことになりましたが、シン・月刊地域医学の準備も併せて大変だと思います。

杉田 新しいものを立ち上げるのは大変ですが、それ以上に長年編集長を務められた山田先生の後を受け継ぐことに大変なプレッシャーを感じています。でもやるしかありません。

まず先生が月刊地域医学に編集長として関わ

られた経緯を教えてくださいませんか？

**山田** 第1号の発刊が2005年でした。当時私は東京北併設の老健さくらの杜の施設長を務めていたのですが、急遽宮城県の公立黒川病院の管理者として出向くことになった頃です。

**杉田** 先生が黒川病院へ行かれたので、私が先生の後任としてさくらの杜に赴任しました。



2005年4月号 リニューアル記念座談会の座長を務める山田隆司先生

**山田** そうでしたね。当時、市立奈良病院、公立丹南病院、横須賀市立うわまち病院などが次々に公設民営でスタートし、それから東京北社会保

険病院が始まって、という頃で、協会組織が一気に拡大した時でした。一方で、公益事業部ができ、学術部門を担う地域医療研究所がスタートしたのですね。私はその所長に就任しました。地域医療研究所で学会を開催したり、といっても当時は診療所フォーラムという名称で、その後地域医療学術集会、総合診療フォーラム、そして現在のへき地・地域医療学会になったのですが、それから当時できて間もなかった地域医療研修センターを支える仕事も担当していました。広報なども関わる中で月刊地域医学の発行も担当することになったのですね。

それ以前の月刊地域医学は、自治医科大学の中に拠点をもった形で藤本健一先生が編集委員長、高橋昭彦先生がインタビューを担当されていました。どちらかというところまで同窓会報的な位置付けだったのを、新しく地域医療振興協会の学術誌として展開させようということでした。ですから、地域医療研修センターやヘルスプロモーション研究センターの先生方が編集委員として参加して、自分たちで記事を書いて発信したという感じでしたね。

## 五十嵐地域医療学を反芻する

**杉田** 巻頭インタビューは当初から先生がインタビュアーを担当されて、20年間続いた目玉企画でしたね。

**山田** 私にとっては、五十嵐正紘先生の地域医療マインドが精神的な支柱のようなところがあったので、最初の頃のインタビューは五十嵐先生や

五十嵐地域医療学に関係のある奥野正孝先生、吉村学先生……といった人たちのお話を伺うことから始まってつないでいった気がします。

**杉田** 五十嵐先生の10の軸は、今でも地域医療の中心ドグマという感じがします。これだけの年月を経ても色あせず生きているところがすごい